



大明小学校

校長室から

令和元年6月12日

No. 11

文責 校長 飯久保一男

父の日に思う

☆母子・父子家庭があることはもちろん承知しておりますが、No. 6で、母にまつわる詩などを載せた通信を出しましたので、今号は父の日にちなんだ通信を出させていただきます。ご理解をお願いします。

私も父親を25年以上やっていますが、父の日は、母の日よりも影が薄く感じます。我が家の実態としても父の影（髪の毛も）が薄いのですが…。きっと、商魂たくましい日本の企業が、母の日のおまけみたいに仕組んだものに違いないと思い、調べてみました。



<母の日が生まれたのは>

南北戦争の最中、負傷兵の治療や衛生状態の改善のための活動を行った社会運動家の女性がいた。その娘が、女性が亡くなった2年後の1907年、母の日を制定するための活動を始め、この活動がアメリカ全土に広がり、8年後の1915年に「5月の第2日曜日を母の日とする」という法律が施行された。最初に式典を開いたとき、母が好きだった白いカーネーションを飾ったことがきっかけでカーネーションを贈る習慣も始まったとされる。日本で母の日を一般的にしたのは森永製菓である。アメリカで一般的になってから、約20年後の1937年に森永製菓が主体となり、5月8日に『森永・母の日大会』というイベントを行った。森永の大々的な宣伝活動のおかげもあり、5月の第2日曜日が母の日に制定され、全国的に祝われるようになった。

<父の日が生まれたのは>

母の日が始まった2年後、母に感謝する記念日をつくるなら、父に感謝する日もつくってほしいと父子家庭で育った女性が牧師協会に依頼したことが始まりとされる。ところが、当時のアメリカ議会は男性ばかりだった。父に感謝を示す日を公式に認めてしまうのは、男性びいきだと批判されるかもしれないという懸念があり、母の日と違ってなかなか可決されなかった。そのため、母の日の制定から遅れること25年後の1972年まで正式に認められなかった。日本では1982年に初めての『父の日黄色いリボンキャンペーン』が開催され、全国のデパートなどでも展開されたために、一気に父の日セレモニーの文化が全国的になった。

どちらもアメリカ発祥で、それなりの歴史もありました。日本で一般的になったのは、やはり企業などの影響が大きかったようです。発祥の地アメリカにおいても、日本においても、父の日は、母の日にずいぶん遅れて制定されていました。その制定の年の差の通り、世のお父さん方は肩身が狭い思いも多いのかもしれません。会社など外でお勤めのお父さんの姿を子どもたちはほとんど見ていませんので、お父さんへの感謝よりも、お母さんに感謝することの方が、感謝しやすいという面はあると思います。

日本の歴史は男上位の歴史が長くありましたから、食事などのときは、父親がいちばんいい場所に座り、(漫画のサザエさんの食卓がそうです。)父親の食事(お酒?)が最初に準備されました。お風呂に入るのも一番は父親でした。こわいガンコ親父も多くいました。男が台所に入るなんて恥ずかしいこととされていました。もちろん家事などはやりませんでした。女性の社会進出に伴い、父親も母親も働く、共働きの家庭が多くなり、父親も家事を分担するようになってきました。それでも、お母さん方の負担(我が妻に言わせると不満…)は大きいかもしれません。私は、妻が長男を妊娠したころから、夕食の片づけを自分の仕事として受けもっています。しかしながら、妻がカゼをひいて寝込んだり、手をケガして家事ができなかったりというときに、炊事に洗濯に大変困ったことも事実です。こんなことを書いていたら、かなり前のCMで「亭主元気で、留守がいい」というフレーズがはやったことを思い出しました…。

以前に新聞の広告欄に載っていたコラムを紹介します。

娘が少し、さよならをした。

その日は突然やってきた。
何の前ぶれもなくやってきたのだ。

いや、娘は娘でいつ言おうかと考えていたのかもしれない。
私がそれと気づかなかっただけなのかもしれない。
しかしそれにしたって、あまりにもサラッとってくれるじゃないか、まったく…。

はっきり言って、娘を風呂に入れるのは得意だった。
なにしろ、保健センターの「もうすぐ、パパも育児上手！」
という催しに参加（会社を休んで）したとき、
人形を沐浴^{もくよく}させて上手だとほめられた私なのだ。

すわってない首をそっとささえ、小さな体をぬるめのお湯につからせる。
綿のようにやわらかな髪を、お湯で軽く洗い流す。
やがてその髪を子ども用シャンプーで洗う頃になると、娘はいつもこう言った。
「パパといっちょにお風呂入ゆ。」

初めての娘の歌（のようなもの）を聞いたのも、
初めて娘が一から十まで数えるのを聞いたのも、
みんな風呂の中でだった。
娘は、幼稚園の先生にほめられたことを自慢し、
小学校の先生に叱られたことを告白した。
それもこれも、風呂の中でだった。

だけど、その日は突然やってきた。
何の前ぶれもなくやってきたのだ。
娘（小学校4年生）はサラッと宣言した。
「あたし今日から、パパと一緒に風呂には入らない。」

そのセリフの平均年齢はいくつなのだろうなどと思いながら、私は一人で風呂に入った。
ふと気づくと、いつの間にか妻が買ってきた子ども用シャンプーは見当たらず、
そこにあるのは娘が自分で選んだお気に入りのシャンプーだった。

（「花王」新聞広告欄より）

